

第6室 染織―広東平絹幡と幡足残欠―

今回の染織は「広東平絹幡と幡足残欠」というテーマ。法隆寺を代表する幡のうち、幡身第1坪目に経緋の広東裂を当てた広東平絹幡、幡頭・幡身・幡足をすべて備えたほぼ完形品の広東綾幡等を展示します。また平ケースでは多色の平絹で仕立てられた平絹幡をはじめ、さまざまな色の平絹幡足、「鵜寺」の銘がある鮮やかな赤地平絹等をご覧頂きます。

○「幡（ばん）」とは

仏教儀礼に用いる旗のこと。形は人体のように、頭に当たる幡頭（ばんとう）、胴に相当する幡身（ばんしん）、足の幡足（ばんそく）からなっています。

N25：広東平絹幡（かんとんへいけんばん）

幡身の上部に、数色の色に染めわけられた赤地の経緋（たてがすり）を用いています。これを広東裂と呼んでいます。7世紀に作られた法隆寺の伝来品に多く見られる一方、8世紀を中心とする正倉院の染織品にはほとんどみられません。おそらく、中国や朝鮮半島から伝えられた貴重な織物として、この幡に使われたと考えられます。

N304-2：広東綾幡（かんとんあやばん）

幡頭、幡身、幡足ほぼすべて備えた貴重な幡。縦長をした長方形の坪に経緋（たてがすり）の広東裂と文様を織りだした綾が残っていることから広東綾幡と呼んでいます。また縁の各所に金銅製の丸金具を付けている点も特徴的です。

N319-38：平絹大幡残欠（へいけんだいばんざんけつ）

さまざまな色で仕立てられた大型の大幡です。いまは幡身の一坪分も遺っていませんが、かなり大型で縦に長い坪を備えていたことがわかります。なお、解体修理の結果、幡足的一条には讃岐（さぬき）国から貢納された調の平絹が用いられていたことがわかりました。

N319-11：平絹幡残欠（へいけんばんざんけつ）

N319-13：平絹幡残欠（へいけんばんざんけつ）

N319-20：平絹幡残欠（へいけんばんざんけつ）

N-319-28：濃緑地大双竜唐草四弁花円文綾幡足残欠

(こいみどりじだいそうりゅうからくさしべんかえんもんあやばんそくざんけつ)

綾でできた幡足の残欠。文様は、大きな円文のなかに、胴をくねらせた勇ましい竜を向かい合わせに配し、円文の外側には唐草文と小さな花文をめぐらす。綾は光のあたり加減で文様がはっきり見えるため、見る角度を工夫しながらご覧下さい。

N319-49：赤地平絹残欠〈鵜寺銘〉(あかじへいけんざんけつ いかるがでらめい)

目のさめるような鮮やかな赤地の平絹残欠。法隆寺の染織品のうち、とりわけ赤と紫、紺色などは、まるで今染めたのではないかとおもわれるほど発色がよく、見る人を驚かせるものがあります。なお、一方の幡足上部には「鵜寺」(いかるがでら)と墨で記されています。これは法隆寺の別称である「斑鳩寺」を指したものです。

○さまざまな色の幡足残欠

幡足の部分のみが遺った残欠。法隆寺幡の幡足の仕立ては、長い帯状の裂の両側を縫うだけで、片側が織耳(織物の両端)の場合は、縫わないでそのまま用いるという簡素な仕立てです。一口に赤や青、黄色といっても濃淡によって様々な表情を見せています。飛鳥から奈良にいたる時代、人々が祈りのなかで生み出した染色の美をごらんください。

N319-51-2：紺地平絹幡足残欠(こんじへいけんばんそくざんけつ)

N319-51-3：淡縹地平絹幡足残欠(うすはなだじへいけんばんそくざんけつ)

N-319-57-1：青地平絹幡足残欠(あおじへいけんばんそくざんけつ)

N319-61-1：赤地平絹幡足残欠(あかじへいけんばんそくざんけつ)

N319-67-2：黄地平絹幡足残欠(きじへいけんばんそくざんけつ)

N-319-81-2：黄地平絹幡足残欠(きじへいけんばんそくざんけつ)

N319-98-3：紺地平絹幡足残欠(こんじへいけんばんそくざんけつ)

N319-137：黄地平絹幡足残欠(きじへいけんがんそくざんけつ)